論文審査の結果の要旨

氏名　曺　泳在

本論文は、農村を生態村として整備するという目標を設定し、そのための集落評価体系を構築することを目的に、生態村の概念の整理、韓国農村における優秀集落の現地調査、生態村づくりのための「集落落評価体系」の構築、韓日の農村集落への適用と評価に関する研究を行っている。

まず序論においては、農村・農村集落をめぐる国際的な動向を説明し、これを研究の背景とし、そのうえで研究の目的を設定している。

第２章では、生態村の概念を整理している。生態村に関する韓国および諸外国の既往研究をレビューしたうえで、生態村を「生活環境（住む場）、生産環境（働く場）、自然環境（休む場）が調和を成し、その機能と役割が維持される持続可能な農村集落」と定義している。そのうえで、生態村の成立要件 12 項目を抽出している。すなわち、良好な生活環境の要件としての４項目、良好な生産環境の要件としての４項目、そして良好な自然環境の要件としての４項目を提言している。

第３章では、韓国の農村において優秀とされている農村集落の現況調査を行っている。農林部による各種の農村整備事業、環境部による優秀な集落の顕彰、そして行政以外による優秀集落の選定をレビューし、「風水地理伝統村」、「自然生態優秀村」、「農村観光村」による選定地区から本研究の対象地を計６集落選定している。そこでの現況調査の結果、風水地理的伝統村の自然と調和する立地条件及び空間構造、自然生態優秀村の豊かな自然環境及び生態資源、農村観光村の良く維持されている農村自然景観及び伝統文化等を抽出し、これらの集落が生態村として位置づけられる可能性が非常に高いと判断している。しかし、環境汚染の加速化、自然と調和の取れていない生産活動及び生産空間、経済的な不安定は、研究対象地の共通的な問題であり、生態村づくりの大きな障害になっていると指摘している。

第４章は本研究の中核をなす集落評価体系の開発の章である。まず既往の研究を整理し、生態村としての目標となる項目を抽出している。すなわち、生活環境大項目における６つの目標、生産環境大項目における４つの目標、自然環境大項目における４つの目標を、生態村づくりの目標項目としている。続いて、持続可能性の評価指標として、既往研究から空間レベルごとに 26 の指標を抽出し、さらにこれをまとめて、20 個の評価指標を抽出している。それぞれの指標ごとに具体的な評価基準を設定している。各評価指標値から総合的な評価に至る過程には、ファジィ理論を適用し、各指標の評価は算術平均により、目標の評価ではファジィ言語規則Ｉを、小項目の評価ではファジィ言語規則Ⅱを、大項目の評価ではファジィ言語規則Ⅲを用い、最終的に集落を評価する体系としている。

以上のようにして構築した集落評価体系の実用性を検証するために、韓国と日本の農村集落から研究対象地を選定して、評価を行っている。農村集落の選定にあたっては、本研究の目的に即して、生態村として先進的な地区を含むこととし、韓国全羅南道の楡川（ユチォン）集落、会竜（フェリョン）集落、日本の鳩山集落（千葉県香取市）を選定している。

各評価指標値を算出するために、統計数値の入手、現地における踏査、聞き取り調査、アンケート調査を実施し、生活環境、生産環境、自然環境それぞれにおける評価、そして最終評価値をファジイ理論に基づいて示している。

しかしながら、評価対象地が共通に持っている問題として、人口および経済問題、そして高齢化に関する問題を指摘している。これは、ほとんどの農村集落が負っている問題であり、農村の持続可能性において深刻な阻害要因になっていると指摘している。

第５章では、本研究を総括し、今後の課題を提示している。

本論文で提示した持続可能性評価体系は、多くの既往研究に基づいた理論的妥当性を有し、評価項目とその総合化が具体的に示されていることから、実用的でもあると評価できる。しかしながら、各項目の総合化においては、本研究で示したただ一つの方法だけが正しいとは言い切れない。例えば、ファジイ規則による客観的・公平な指標ではなく、より少ない指標による大胆な指標を用いるという考え方もあろう。そのためには、各種の総合化の方法の比較検討や、より多様な地域を対象にした実証研究も必要であろう。

とはいえ、本研究の提示する評価体系は、これまでにないものであり、農村空間計画分野において、すぐれた研究であり、先進国・途上国を問わず、農村開発の現場に適用できる可能性を有していると評価できる。以上により、本研究に対し、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。